

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）  
 大学院生研究  
 2012年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学	研究科	英米文学	専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名				
	文学研究科・英米文学専攻・三年		小椋道晃 印				
指導教員	所属・職名		氏名				
	文学部・教授		後藤和彦 印				
自然・人文・社会の別	自然	人文	社会	個人・共同の別	個人	共同	名
研究課題名	ハーマン・メルヴィルとアンテベラム期のアメリカ初期作品を中心に						
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名				
	文学研究科 英米文学専攻 博士課程後期課程三年		小椋 道晃				
研究期間	2012年度						
研究経費	200千円（実績額又は執行額）						

**研究の概要**（200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。）

本研究は、メルヴィルのテクストを、同時代の言説と関連させつつ読み解くものである。十九世紀半ばのアメリカにおいて、見知らぬ他人同士が相互に結びついているという一体感が、ナショナリズムの精神を育んだことはしばしば指摘されてきた。アメリカの民主主義の基盤となるのは、「共感」や「友愛」といった感情であり、そこではさまざまな差異を隠蔽し、同質性に基づく「親密さ」という言説が国家的イデオロギーとして機能したとされている。そのような歴史的、文化的文脈を踏まえた上で、メルヴィルが描く親密な関係性とはいかなるものかを検証する。そのために、『タイピー』、『白鯨』、『ピエール』、そして『イスラエル・ポッター』を取り上げ、作家の想像力のなかで、個人の相互的な結びつきである「親密さ」という感情とナショナリズムがいかに連動しているのか、あるいは隔絶しているかを考察する。

キーワード（研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。）

[ ハーマン・メルヴィル ] [ ナショナリズム ] [ 親密性 ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本年度もまた昨年を引き続き、メルヴィルのテクストを、同時代の言説と関連させながら考察することを目的とした。まずは、メルヴィル第一作目にあたる長編『タイピー』で描かれる「風景」に焦点を当てることによって、作家が「音のない自然」を反復的に描いていることに注目して読み解いた。メルヴィルと「風景」あるいは「風景画」という主題自体は、決して珍しいものではなく、主として『白鯨』以降の作品をめぐって、自然表象や同時代の視覚芸術との関係を論じたものは数多くある。たとえば、『白鯨』を論じる John M. J. Gretchko によると、メルヴィルは、崇高を求める風景画家を諷刺していると指摘しているし、また、『ピエール』と「ピアザ」について考察する Robert E. Abrams によれば、「南北戦争前におけるアメリカの自然風景の感覚を公的に形成する代表的かつ広範囲にわたる実践」を、メルヴィルは懐疑的に提示しているとされている。しかしながら、初期作品、とりわけ Richard S. Moore が言うように、「成熟した、あるいは構造化された審美的視点をもたない」とされる『タイピー』について、風景という観点から論究されることはそれほど多くはなかった。たしかに、通常ロマン派作家としてくくられるメルヴィルの描く自然は、極めて象徴的であり、かつ寓意性の強い傾向があることは間違いない。それは、Lawrence Buell が述べるように、メルヴィルの象徴の多用が、作家自身を現実の自然・環境から遠ざけているとも考えられよう。しかしながら、注意深く作品を読めばわかるように、メルヴィルの描く自然や風景には、作家の社会に対する隔絶感と、それゆえ希求される自然との親密な関係性もまた描き込まれているように思われる。

「音のない自然」あるいは「自然の沈黙」としてまず想起されるのは、ロゴス中心主義的な近代西欧社会のなかで、自然がいかに「沈黙」させられてきたかを問題視するクリストファー・マニスの言葉である。これは「不合理な沈黙の世界」としての自然に主体性を見出さない人間の合理主義に対する懐疑と言い換えられるが、自然は「語らない」ゆえに、主体ではないという暗黙の認識は、『タイピー』のメルヴィルにも当てはまることなのだろうか。以上の問題を踏まえ、メルヴィルが、言語表象の外側に広がる「沈黙」の世界を「語る」ことについて、あるいは、そのような自然を言語によって分節化する暴力性について、極めて意識的であったことを提示した。そして、作家が自然との牧歌的な調和を求めつつも、それが常に不安感や恐怖とともに生起することを示した。この研究成果は、「音のない自然—Typee の風景を読み解く」と題して、近畿大学において開催された文学・環境学会／ASLE-Japan (全国大会) で口頭にて発表した。

メルヴィルは、評論「ホーソンとその苔」のなかで、ナサニエル・ホーソンに対して親密なメッセージを込めつつ、見知らぬ魂同士が結びつくことによって共有されるアメリカを幻視している。ここで、作家の文学的ナショナリズムは、読者大衆およびその審美眼についての根深い疑念と同居しているが、興味深いことに、メルヴィルは、アメリカの偉大な精神が個別に育まれるのではなく、「複数の天才たち」によって共有されるものであると述べている。そこで、ホーソンとの個人的な「親密さ」を基盤に、文学におけるナショナリズムを称揚する作家の意図が、『白鯨』、『ピエール』、『イスラエル・ポッター』においていかに描きだされているのかを検討していった。

十九世紀半ばのアメリカにおいて、見知らぬ他人同士が相互に結びついているという一体感が、ナショナリズムの精神を育んだことはしばしば指摘されてきた。アメリカの民主主義において基盤となるのは、「共感」や「友愛」といった感情であり、そこでは、同質性に基づく「親密さ」という言説が国家的イデオロギーとして機能したとされている。メルヴィルもまた、孤独を理想としていたわけではなく、個人間の親密な感情の発露を描いた作家であることは言うまでもない。たとえば、Dana Nelson は、合衆国の領土拡張や産業革命によって、それまでの共同体的な拘束力が弱まっていくなかで、人々は、見知らぬ人々との共通性を求めており、とりわけ「白人男性」というカテゴリーが「友愛」として、アメリカの民主主義における基盤を形成したと指摘している。

**研究成果の概要 つづき**

さらに、Peter Coviello は、ネルソンの説に同意しつつ、「親密な国家」としてのアメリカに対する作家の両義的な立場を論じている。つまり、国家の独立とその正当性を確固たるものにしようとするナショナリズムの機運が高まるなかで、人々は民主主義の理念によってではなく、むしろ、見ず知らずの他人同士が抱く「親密さ」という情動によって結びついてきたとされている。以上の文脈を踏まえ、『ピエール』のなかで、最終的に孤立する主人公を通して、メルヴィルが描く親密な関係性とはいかなるものかを検証した。そして、作家的想像力のなかで、個人の相互的結びつきとしての「親密さ」とナショナリズムがいかに連動しているのかを考察した。これは、「*Pierre*における親密さとナショナリズム」と題して、東京女子大学で開催された第46回大学院英文学専攻課程協議会で、口頭にて発表した。

また、親密さに基づくナショナリズムが、さまざまな差異を隠蔽しつつ、想像の共通性によって結びつけられたネイションを生み出すのであれば、その親密さもまた、何らかの基盤によって永続的に反復されなければならないはずである。評論「ホーソンとその苔」に関して、Edward L. Widmer は、ヤング・アメリカ運動を代表する編集者である Evert Duyckinck が、このような時代の中で、メルヴィルをナショナリスティックなヤング・アメリカの政治的立場に合わせるように仕向けていったと述べている。その意味において、メルヴィルが友愛という社会的要請に対して居心地の悪さを感じていたとしてもおかしくはない。そこで、評論のすぐ後に出版された『白鯨』における男同士の親密な関係に焦点を当てて考察することで、友愛に基づくナショナリズムに対する作家の懐疑的な態度を提示した。その際、個人的な親密さとは、語り手イシュメイルによる、すでに失われた船員たちを現前させる行為のなかで生じることから、単なる共通性に基づく友愛のあり方そのものを問い直すことであることを示した。これは、「『白鯨』における親密さの諸相—男同士の友愛とナショナリズム」と題して立教英米文学会で口頭にて発表した。

昨年度の研究で詳細に論じた『イスラエル・ポッター』論において、筆者は、メルヴィルが本質的に備わるアメリカ的性格に対しては懐疑的であり、また、単純な愛国心に基づく一面的なアメリカ建国神話を注意深く否定していることを明らかにした。そして、メルヴィルがアメリカ独立戦争を描きながらも、国家という枠組に対して強い懐疑の念を抱いていたことをあらためて確認していく上で、個人の「親密さ」という束の間の感情の共有がテキストに刻み込まれることに着目した。そこで、主人公イスラエルのアメリカ的性格の曖昧さを検討したのち、アメリカ独立革命時の英雄像が、まなざしの力学によって虚像へと反転することを確認し、作家が英雄的な男性像を切り崩しつつ、アメリカ神話を注意深く転覆させていることを示した。この研究成果を基に加筆修正した論文は、「ナショナリズムの彼方へ—*Israel Potter*における親密さ」と題して、『立教レビュー』第42号(2013)に投稿し、掲載された。そのなかで、英国人の兵士に偽装するイスラエルが、捕虜となっている祖国の兵士と出会い、互いの親密な感情を共有する場面を取りあげた。そして、抽象的あるいは観念的な「アメリカ的性格」というよりもむしろ、個人の親密な感情、つまり、異性愛や同性愛とも明確には名づけえない、不意に訪れる情動のリアルな存在を、メルヴィルは描いていると結論づけた。これらを検討することで、ナショナリティという意識を超えて共有される束の間の情動がたしかに存在することに信をおいていたメルヴィル像を浮かび上がらせることができた。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

(1) 雑誌論文

- ・小椋道晃「ナショナリズムの彼方へ—*Israel Potter*における親密さ」『立教レビュー』第42号(2013): 15-28.

(4) 学会発表

- ・小椋道晃「音のない自然—*Typee*の風景を読み解く」、文学・環境学会／ASLE-Japan (全国大会)、2012年8月31日、於近畿大学。
- ・小椋道晃「*Pierre*における親密さとナショナリズム」、第46回大学院英文学専攻課程協議会、2012年11月24日、於東京女子大学。
- ・小椋道晃「『白鯨』における親密さの諸相—男同士の友愛とナショナリズム」、立教英米文学会、2012年12月15日、於立教大学。

ニューズレター

- ・小椋道晃「第18回ASLE-JAPAN/文学・環境学会」『ASLE-Japan Newsletter』33号(2012): 3-4。